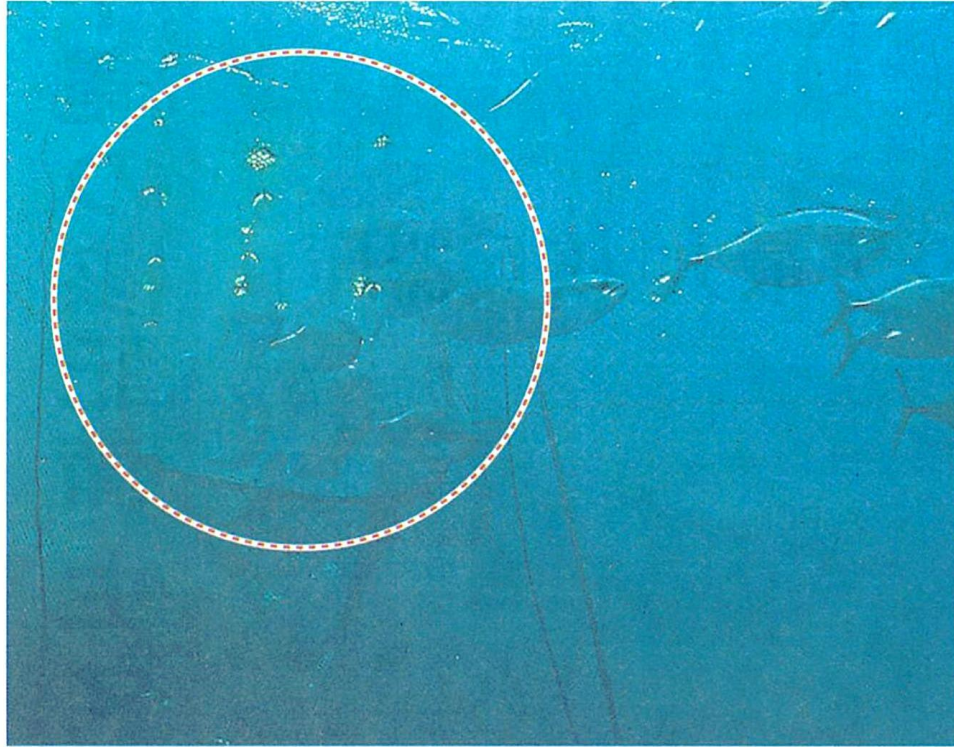


網に「逃避口」9割近く生存



定置網に設けたトンネル状の「逃避口」(円内)から出入りする小型クロマグロ=6月下旬、深浦町松神沖(ホリエイ提供)

小型マグロ放流法開発

2015年から漁獲規制が始まったクロマグロ小型魚にし、県と県定置漁業協会は19日、青森市のアラスカで、資源管理に関する研究技術報告会を開いた。水産関係の研究機関や大学、漁業会社などでつくる研究グループが、定置網に入った小型魚を生きのまま網の外に放す技術の開発状況を発表しました。

(工藤俊介)

水産総研など深浦沖で実験

研究グループは、県産業技術センター水産総合研究所(平内町)、水産総合研究所センター水産工学研究所(茨城県)、東京海洋大学、深浦町の大型定置漁業「ホリエイ」の4団体で構成。実験は15年6～8月、深浦町沖で実施した。

定置網にかかった小型魚のうち、タモ網ですくって生け簀に放した魚の大部分は死んだが、網の一部に設けた「逃避口」から生け簀に逃れた魚の生存率は9割近くに上ったという。

研究グループ代表の秋山清二・東京海洋大准教授は「生存率の高さで見ると、漁具への逃避口の設置は有効な放流方法と考えられる」と報告。ブリなど他の魚が網から逃げる場合もあったため、「今後は小型マグロだけを放流する技術の開発に努めたい」と語った。

県水産振興課の野呂恭成課長は「マグロ資源管理では、小型魚のみを放流する技術が求められている。研究機関には引き続き、効果的な放流方法の開発に取り組んでもらいたい」と話した。